光の声が聴けるかもしれないと思った。
光に染まって、女の髪は、さらに赤く見えた。光の赤と髪の赤の区別がつかない。どちらの赤が勝っているのか、わからない。女は、ゆっくりとX氏に接近してくる。もう、女の眼も口も見える距離だ。女は、白線の右側を歩いている。女の位置に立てば、左側になる。
2人がそのまま白線を跨がずに歩き続ければ、衝突もなく、ただ単にすれちがって終りということになるはずだ。
女の髪の毛の1本1本がX氏の眼には見わけられる。それは、すでにX氏のものだ。赤い髪の女もX氏を認めた。そのことは、もう動かない。1歩、1歩と2人の間がつまってくる。X氏は念じた。そのまま歩け、と。俺は、絶対に、白線を跨がない、君も、そのまま歩け。俺にはわかっている。君が、俺にとって何者であるのかを。君にも、そのことがわかっているはずだ。歩け、直線にそって。
赤い髪の女は、いつもの、少し疲れたような顔をしている。もう10秒もすれば、X氏の足が踏む位置と赤い髪の女が踏む位置が交わる。
眼が笑った。
いや、眼が痙攣した。
足が勝手に動いた。白線を踏んだ。白線を跨いだ。その瞬間、X氏の左手がぴくりと動いた。右

手が左手を握った。左手は右手のいうことをきかない。雨傘が兇器になった。X氏の左手は、雨傘を握りしめると、赤い髪の女の左胸に突きだした。一寸の狂いもなかった。光が散った。心臓の中心に尖った雨傘の先が突き刺さった。大きく見開いた女の眼が一瞬静止した。頭のなかの風景が消えた。声が消えた。外界がつるつる滑った。鳶色に輝やいていたX氏の眼が、不意に羊色に変わった。
赤い髪の女は、前のめりになって、X氏の方へと身体を預ける形となった。凹と凸がぴったりと吸いついて、重なった。どうして、私、なにもわるいことをしていないのに。X氏の耳に女の声が流れた。ちがう、ちがう、ここは俺のいる場所じゃない。X氏は叫んだ。何もないまっ白な空間がX氏の眼に映った。
ビッグ・バンの風の音は、X氏の耳から消え去っていた。